

飯田水引

長野県知事指定伝統的工芸品
 指定年月日：平成26年11月27日



元禄時代(1700年頃)に飯田地方で盛んとなった元結製造の原紙を用いて、生水引が造られたのが始まりと言われ、明治以降、元結の需要が減少する中、その技術を活かした紅白水引等の生産が拡大した。

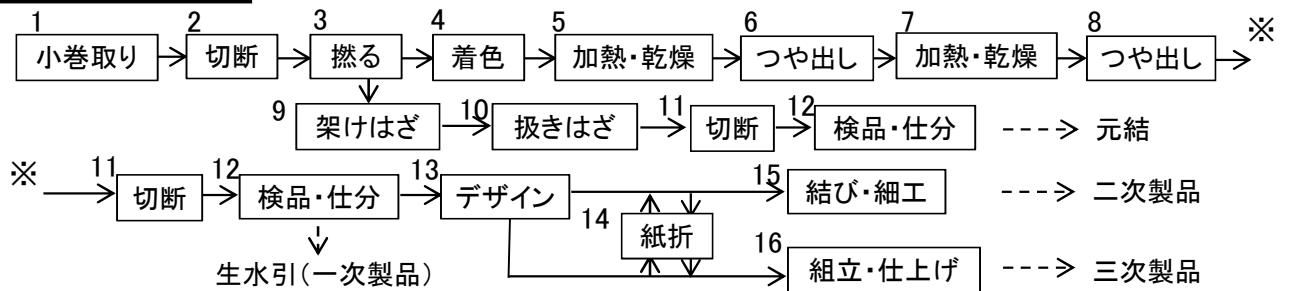
昭和20～30年代には、金封、結納品飾りや鶴亀、松竹梅など立体的な製品が造られるようになり、水引の結び・細工・組立の多様化・高度化が進んだ。現在では飯田地方の全国シェアは約70%となっている。

製造者団体	飯田水引協同組合	飯田市上郷別府3338-8 TEL 0265-22-3363	事業者数 22
主な製品	金封、結納品飾り、正月飾り、民芸品、元結 ほか		
製造地域	飯田市、松川町、高森町、阿南町、阿智村、平谷村、根羽村、下条村、売木村、天龍村、泰阜村、喬木村、豊丘村、大鹿村、駒ヶ根市、飯島町、中川村		
伝統的な技術・技法	○「結び」、「細工」、「組立」及び「仕上げ」は手作業で行うこと。		
伝統的に使用している原材料	○水引に使用する紙は和紙又は水引原紙とすること。 ○元結に使用する紙はコウゾ又はミツマタを原料とした和紙とすること。		

沿革

- ・1700年頃から元結原紙の一部を原料として、紅白水引が飯田地方の名護熊村などで製造されたのが始まりと言われている。
- ・明治維新以降、儀式文化の向上にも支えられ、生水引の需要は増えていき、昭和6年には紅白・黒白水引の全国シェア50%を占める一大産地となった。
- ・終戦後(昭和22年)は原紙不足に直面し、静岡や愛媛から原紙を買い付けるようになり、昭和27年頃から生水引(一次製品)の東京等への納品のほか、結納品や金封など細工物(二次製品)も造るようになった。
- ・昭和30年代には結び方や細工に創意工夫がなされるようになり、以降、鶴亀、松竹梅など多様な立体的な製品(三次製品)が造られるようになった。
- ・昭和40年頃から生水引生産の機械化が始まり、手作業による「水引扱き」が減少する一方で、細工物(二次製品)の需要が増大した。現在、飯田地方の全国シェアは約70%である。

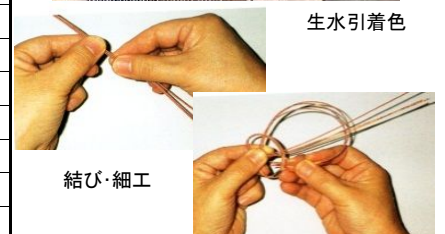
主要製造工程



1 小巻取り	原紙から「ひろ」を造るため、小巻にする
2 切断	小巻にした紙を小幅に切断(「ひろ」)
3 撚る	「ひろ」を撚り玉機にかけて、撚り玉を作成
4 着色	染料、紙巻又はフィルム巻により着色
5 加熱・乾燥	天日又はガス乾燥機で乾燥
6 つや出し	塗料の塗布によるつや出し(5と6を繰り返す)
9 架けはざ	1本1本撚りを入れ強度を高め、「わさ」(鉄製の棒)に結びつける
10 扱きはざ	木綿取りによる「ちゃら」(塗料)の塗布とのりづけ、つや出しを行う
11 切断	長さを揃えて切断(元結は「けんうち」をして切断)
12 検品・仕分	検品・仕分けを行い生水引又は元結完成
13 デザイン	図案及び生水引の色や種類の検討・決定
14 紙折	紙部分の製造
15 結び・細工	平面的な飾り(二次製品)の組立・検品
16 組立・仕上げ	立体的な飾り(三次製品)の組立・検品



生水引着色



結び・細工